

成蹊会誌

1966年6月第

25号





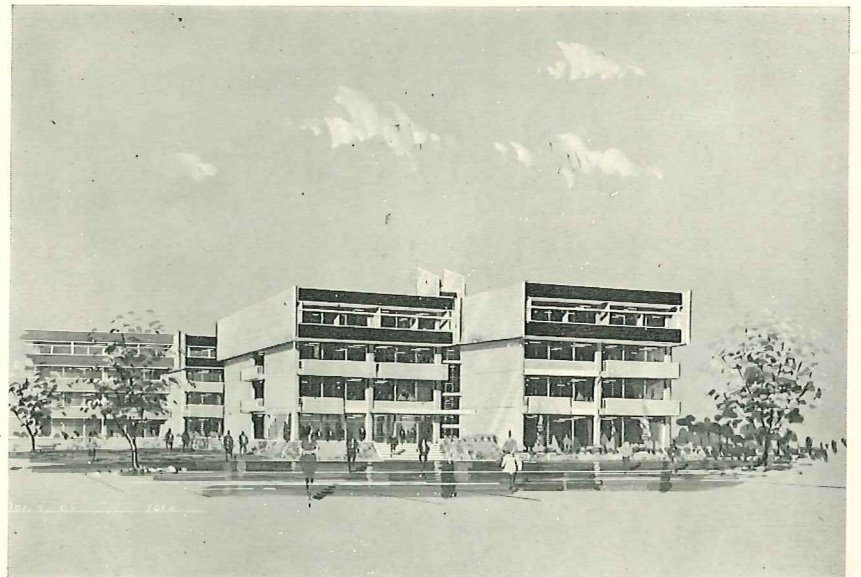
小学生から大先輩まで参加した大合唱団（日比谷公会堂）



小学校50周年式典（小学校体育館）



新たに4・5階を増築した工学部全景



成蹊学園図書館完成図（昭和42年2月竣工予定）

大学院の設置にあたりて

常務理事 丹羽孝三
総務局長

創立五十周年記念事業と一として大学に工学部を増設した時、将来、大学院を開設しようという構想は関係者の念頭にないわけではありませんでした。しかし、大学院の設置は学部が完成し、その体制が充実しているということが条件となっており、具体的な計画は当時としてはしばらく見送らざるを得なかった次第であります。

その後、四年たち、大学に文学部が増設され、また政治経済学部も政治・経済の二学科が置かれて整備が一段落いたしました。そうしたとき、学部としての一応の体制がかたまり、かつ学問的技術的に高度なものが要請される工学部から大学院設置の要望がでてまいりました。工学専攻のみで大学院を設置することは、総合大学としてふさわしい姿とは考えられませんが、他の学部も漸次充実した暁には、大学院の研究科を設置し得るのではないかと希望いたしました。

さいわい、理事の方々の積極的な賛同を得、昨年春より申請準備をすすめ、期待以上の満足な審査結果を受けることができ、三月十八日付で認可、この四月から大学院を開設することができました。

た。同窓の諸兄からも、さまざまなご支援を得ましたことは感謝にたえません。今後とも大学院大学としての成蹊大学、そして成蹊学園の発展のためのご協力をお願いいたしまして、大学院設置のご報告とご挨拶にかえる次第であります。
（専門三回卒）

工学部長 福田節雄
大学院工学研究科長

昭和三十七年に開設された当工学部は、本年三月第一回の卒業生として一七二名を世に送ることができました。

今般当工学部が第一回の卒業生を送り出すに当り、教育並びに研究の場としての学部の体制が一応整いましたので、昨年末工学部創設当初からの構想に従って大学院工学研究科の設置準備を進めてまいりましたが、昨秋学園理事会の承認するところとなり、文部省へ設置認可申請書を提出しておりましたところ、幸いにしてその審査に合格し三月十八日工学研究科の設置が認可されたのであります。本年四月開設した大学院は工学研究科修士課程で、電気工学・工業化学・機械工学の三専攻をもって組織され、入学定員は各専攻とも八名、計二十四名であります。従って本学部の卒業生は他の大学院へ進学することなしに、本大学においてその目的を充たすことができることになったのであります。

本年度の大学院進学者は十二名であります。他大学からの希望者があつたにもかかわらず、進学者はすべて本大学の出身であります。そして去る四月九日成蹊学園の最高学府として第一回の入学式を挙行することができたのであります。

因みに現今の世界の理工系教育を見ると、学部教育に対する大学院教育の比重が質的にも、量的にも非常に高くなりつつあります。我国でも工科系学部でその上に大学院がないところは僅か数大学に過ぎない状況であります。最近の科学技術の進歩は他の分野に比して急速に高度化しておりますので、工学教育の機関もそれにふさわしい体制を整えなければ、充分な教育が果せないであります。そこで今日では学部の上に大学院を置いてその役割を果そうとしている状況であります。

先に述べましたように工科系学部は殆んどの大学が大学院を有しておりますので、今日では大学院を置かない大学は一流大学とはいえないような状態であり、また大学院進学の学生数の比率も年々多くなっております。このような趨勢にある時、本学園に工学研究科の設置をみたのは関係者一同の深く喜びとするところであります。大学院の運営に当たっても重要なことは優れた教育組織と研究設備の充実であります。幸いにしてこの大学の工学研究科は立派な教授陣を整えることができましたので、全く心強い限りであります。今後は工学研究科としてさらに博士課程の設置をすべく、研究並びに教育体制の強化充実につとめるつもりです。

以上をもちまして大学院工学研究科開設に当たっての報告にかえる次第であります。卒業生各位におかれましてはさらにご支援ご鞭撻を賜りますよう希つてやみません。

最後に成蹊学園卒業生各位の深いご支援により第一回の卒業生全員の就職並びに進学が決りましたことを申し添え、深く感謝する次第であります。

おかげさまで、予定したものがすべて順調に進められましたことは、皆さまの御協力のおかげと感謝いたしておる次第です。

記念誌は巻頭の挨拶につづいて、創立時当から現在まで五つに区切って、

池袋時代の成蹊小学校

吉祥寺に移って（大正十三年から昭和十年まで）

丸山 鋭雄先生
栗山 重先生

新成蹊の確立（昭和十一年から昭和十七年まで）

西原慶一先生

戦中と戦後の時代（昭和十七年から昭和三十年まで）

滑川道夫先生

最近十年の歩み（昭和三十一年から昭和四十年まで）

杉山 稔先生

右のように旧職員にお願いし、さらに、座談会「成蹊小学校の回顧」には、谷岡喜久蔵氏のお骨折で、小学校の古い卒業生の方々にお願い願って、昔を語っていただきました。他に成蹊小学校の現在の活動状況および略史を掲げました。

記念式当日のよう

十一月二日、心配した雨もあがり、午後二時多数の来賓および卒業生、保護者を迎えて記念式典が開始された。

国歌斉唱のあと、まず高瀬総長から、成蹊教育においても、日本の教育においても、発達した面も多々あるが、退歩した面がある。

それは、とくに人間教育の面についていえる。われわれは、中村春二先生の間鍛錬の精神にのっとり、苦難逆境に耐えていく、根性のある人間を作ることを目ざしたい。との挨拶があった。

成蹊小学校創立五十周年記念式

小学校長 村上 莞爾

中村春二先生が、教育理想を実現するために、大正四年四月五日池袋の地に創始された成蹊小学校は、本年（昭和四十年）創立五十周年を迎えたのである。

一 学年三十名という小数定員によって、一人一人に行き届いた教育をし、個性を伸ばしながら人格鍛錬をされた成蹊の教育は、世の注目を浴び、下自ら蹊を成して、時代の進展につれ、日に日に発展して、今日では、十八学級児童数八〇〇名を数えるようになり、桃李門に満つという状況である。ここに五十周年を迎え、創立当時の精神を温め、本校の新しい指標を定めるのも、また意義深いことを思い、学園当局および保護者ならびに卒業生の御協力を得て、さきやかではあります。記念の行事を計画した次第である。

記念行事の概略

- 一、記念誌の発行「成蹊小学校五十年のあゆみ」
- 二、記念品「文鎮」
- 三、記念運動会「十月十日」
- 四、記念式典「十一月二日」
- 五、記念文化祭「十一月三日、四日」
- 六、記念子ども会「十一月五日」

続いて、小笠原理事長からは、五十年の間には、敗戦という大きなできごとがあったがこの未曾有の混乱の中で、成蹊を守り今日の盛大をもたらした理事者や先生方に深く感謝したい。なお国が衰えるか興るかは国民の質による。人間的資産をたよりに乗り切っていかなければならない日本では、人間の教育が一番重要である。この際ますます中村先生の建学の精神の充実発展を期してもらいたい。との話があった。

つぎに村上小学校長は、大正四年四月五日中村先生が池袋に成蹊小学校を創立された所以から説きおこし、具体的事例をとりあげながら成蹊教育の展開を説明し、個性と天分とを生かす教育とともに安易な我見我情を押さえる精神的鍛錬の主要性を強調し、職員心を一にして教育に邁進したいと結んだ。

この後祝詞にはいり、初めに私立初等学校協会会長佐藤瑞彦氏は中村春二先生の著書「二里行く人」の精神こそ、成蹊教育の真髄であらうと述べられた。

ついで、成蹊小学校父母と教師の会会長、谷沢一氏は、最小の努力を費して、最大の効果をあげようとする人間が多いから世の中がよくならない。最大の努力を用いて最小の効果をあげようとする人間が多くなることが望ましいことだ。それは成蹊の「二里を行く人」という人格鍛錬にも通ずるものがある。高瀬総長、村上校長の教育方針は、父兄の望むところであって努力を惜しまない。と力強く結ばれた。

最後に成蹊会を代表して田中博次氏が、池袋時代の思い出話を丹念に語ってくださり、校歌を斉唱して式を閉じた。

式典終了後直ちに、会場を食堂に移し祝宴にはいった。野田学長後藤武蔵野市長、丸山盈進学園長、西原先生、河野国会図書館長等のありがたい祝詞をいただいた。

終わって、新旧職員懇談会を行なった。遠く三重からかけつけた富田先生をはじめ、丸山鋭雄、大久保捨蔵、栗山重、藤井元子先生など中村春二先生のもとで成蹊教育の基礎を築かれた方々をはじめ、吉祥寺時代の西原慶一、香取良範、斎藤国衛、山本二郎、吉田虎彦、杉山稜、土方敏夫、松田京子、小木成子、福永峯子の諸先生合わせて十四名と現職員全員出席して、昔話に花を咲かせたなどやかな会であった。

新しい図書館について

図書館長 福与 正治

長いこと延びのびになっていた大学図書館の建築が、この三月から始まりました。申すまでもなく、図書館の建設は、学園の五十周年記念事業の一つとなっていて、もう何年も前のことですが、前々図書館長の石上教授の時に、設計図もほぼ完成というところまで進み、また前館長小島教授の時には、完全な設計図が出来て、建築雑誌にも載ったほどでしたが、将来の増築という点で難があることなどから、棚上げのような形になっていました。それが昨年のちょうど今ごろ、ようやく期が熟したといましようか、新しく設計

をし直すことになりました。郭茂林氏が東大の吉武教授と連絡をとられながら、半年がかりで設計図を完成されました。そしてさきにも申しましたように、この三月から工事が始まったわけです。完成は明年二月。三月に現図書館から移転。新学年の四月から完全に利用できるようになる予定になっています。

ここ数年、もうすぐ新しい図書館が出来ると言われながら、新図書館の完成を見ないで卒業していった諸君には、ほんとうに気の毒なことをしましたが、完成の暁には、卒業生にももちろん門戸は開かれますから、何かにつけ利用して下さいれば幸いです。実は建築が遅れたために、初めの計画よりかなり大きなものになりました。遅れたことがかえって幸いだったということもあります。というのは、初めの計画では、新しい学部が開設されることを予想しても、学生数三〇〇〇から四〇〇〇を対象としたものでしたが、文学部がまだ一、二年生しかおりません現在でも、全学生数はもう三五〇〇を越えており、二、三年後には四五〇〇〇から五〇〇〇〇近くになりそうです。ですから建築が順調に進んでいたら、今ごろはもう手ぜまになっていたかもしれません。

さて場所は、本館のうしろ、食堂と小学校の前の桜並木の西側で政治経済学部研究室の東側につながるようになっていきます。最終的には五階になるようになっていきますが、さし当って出来るのは四階まで。このうち図書館プロパーの部分は一階から三階までで、その東北の小学校寄りの部分が書庫です。書庫だけは五層になります。四階と、そのうちに増築される予定の五階は研究室になります。四階まででも、書庫の面積をいれると、総坪数が一九〇〇坪弱

で、これは本館とほぼ同じ坪数ですから、その広さもだいたい想像していただきましょう。

一階は、入口に続いてホール（その一部が新聞雑誌閲覧室）、自由閲覧室、視聴覚室になります。

二階は、開架閲覧室（よく読まれる本や講義関係の参考書など二万冊ほど出して、自由に取って読めるようにする。この一部が、辞典類などを集めてある一般参考室になる）と閉架閲覧室（書庫から借り出した本を読む所）になります。二階は図書館の主体で、出納室、カタログ室もこの階です。

三階には、学術雑誌閲覧室（ここは、教職員閲覧室、二階の一般参考室に対して、特別参考室にもなる）、各学科研究室（ここには各学科の専門図書置いて研究の便を計る）、館長室（会議室、応接室を兼ねる）などが出来ます。

事務室は二階を中心にして、一階と三階にも設けられます。事務関係ではこのほかに、一階に宿直室、多用室などがあります。

閲覧室は、自由、開架、閉架、学術雑誌と全部で四室になり、それに学科研究室を加えると、座席数は約五〇〇になります（現図書館では一三〇席）。だいたい全学生数の一割の座席数が望ましいということになっていますから、学生数が五〇〇〇になっても大丈夫です。それに、工学部には各学科にそれぞれ資料室があり、その座席数を入れると、学生が六〇〇〇人になっても十分ということになります。

書庫は三〇万冊から、少し無理をすれば、三三万冊は収容できます（現図書館の書庫は一〇万冊）。現在の蔵書数が約一六万冊で、

毎年の増加冊数は一万を越えますが、書庫については、現在の書庫も使えますから、二十年は大丈夫です。

この辺で、新しい図書館の特色とでもいうものを、少し手前味噌になるかもしれませんが、二、三挙げてみましょう。

一階の自由閲覧室は、自分の本を持ち込んで自習などをする、わりあい気楽に勉強ができる所です。二階は図書館の本を読む所でおもに教養的な読書、教科に関係のある勉強をする所となります。また一般参考室では館員が、学生の読書や研究の相談に応ずるようになります。三階はおもに教職員の研究の場ですが、ゼミナールで発表をしたり、卒業論文を書く上級の学生も利用できます。だいたい研究が専門的になるにつれて上の階にあがっていくことになります。

次に、三階に学術雑誌閲覧室を思いきり広く取り、学術雑誌を出るだけここに集めるようにし、教職員閲覧室をこの中に入れ、さらに一部の学生も利用できるように考えましたが、これはセクショナルリズムを避け、教授と学生、各学部、各学科の研究が、自然に交流して、少数教育と総合大学の実が挙がるようにとの念願からです。

第三に、工学部の研究室は、学部の性質上、図書館から離れているのは止むを得ませんが、文科系の学部の研究室は図書館とつながることが理想的です。この点新しい図書館は、横と上に政治経済学部と文学部の研究室があって、研究室が図書館を囲むようになります。図書館と研究室が離れると、同じ本を両方に備え付けるような無駄が生じます。同じ本といっても、そうそう二つ揃えることは不可能ですから、図書館から研究室に専門書が移ることになり、図書

館の蔵書に大きな穴があいてしまっています。これは、図書館と研究室が離れている大学のなやみの種になっていますが、新しい図書館ではそういう心配はありません。

現在の図書館は、その位置、その狭あいさなど、いずれの点から見ても、前代の遺物的な存在になりかけています。しかし旧制高校の昔からの多くの卒業生の方々の思い出の尽きない所であり、また緑蔭堂文庫の名の示すように、緑のかげの濃い林の中に、捨てがたい風情をただよわせています。これと別れるのは名残り惜しい気もしないではありません。今どき靴を脱いではいらないう時代遅れだとよく言われますが、靴を脱ぐと不思議なもので、何となくこれから本を読むのだ、勉強をするのだという引きしまった気分が誘われます。もちろん新図書館では、そんな不便はなくなりませんが、「汝の足より靴を脱ぐべし」という気持だけは、尊い伝統として残したいものです。

最後に、学園当局、建築関係の方々と言うまでもありませんが、石上、小島両先生の図書館長在任中の御苦心、御努力は大変なもので、不幸にして御在任中に実を結ぶにはいたりませんでした。新図書館はその御苦労の上に出来るようになったものであることを付記させていただきます。
(政治経済学部教授)

在外勤務者子弟の

ための特別学級

特別学級
主 事

杉山

稜

木下産商、東京通商、三菱重工、三井造船、興国人絹、日本銀行、東京銀行

これらの子どもたちの海外在任期間は、三年から四年の者が最も多く、中には六、七年に及ぶものもある。したがって日本の学校教育で要請されている学力程度は、生来の素質のちがいの他に、国情により、在外期間の長短により、また在外中、日本の教育に対する父兄の関心と指導の度合いにより、同年令同学年の者でも、その差はまことに千差万別である。ことに国語科、社会科における学力不足は甚だしく、小学生低学年では、ほとんど日本語を話せなかったり、ひらかなの読み書きが不自由な者が多く、正常な学習軌道にのせるまでにひと苦労である。

卒業生諸君の中にも、今後海外に勤務する者があると思うが、帰国後子どもに日本の正常な教育を大きな抵抗もなく受けさせるためには、事情が許されるならば、小学校三、四年までの教育を国内で済ましてから海外に渡航されることが望ましいことである。

特別学級では現在小学課程を高低の二学級に、中学課程を一学級に、それぞれ複式編成をして、入学直後に各教科別にくわしく診断テストを行なって、指導のスタートを位置づけ、そこから個別的に積みあげをして、学力の回復を図っているのである。入学は随時許されるが、詳細は入学案内書を参照していただきたい。

在外勤務者子弟のために、成蹊学園に操業学級という教育施設が置かれたのは、昭和十年九月十日のことと、同十二年十一月十五日には、操業寮から静専寮に移され、そのまま昭和十五年閉鎖されるまで小学校内に付設されていたので、古い卒業生諸君の中には記憶されている方もあるだろうと思う。

今回開設された特別学級は、いわば当時の操業学級の再建でもあるわけで、わが国の経済発展に伴う時代の要望として生れたのである。昭和三十九年四月十三日、僅か四名の子どもと共に発足した特別学級も、ことして三年目を迎え、すでに四十八名の入学者がありそのうち半数以上は、在外中におくれた学力をとりもどして、学園小中学校の相当学年に編入学を許されている。

これらの子どもたちを地域別及び父兄の勤務先別に分類してみるとつぎの通りである。

(地域別)

23 6 4 4 2 1 1 1 1 1 1

カ 合 衆 国
リ ン ド
メ ン
アイ 英 香
ブ 西
フ イ
ス オ
オ ニ
ア ル

(勤務先別)

外務省、運輸省、日本貿易振興会、石油資源開発、衆議院渉外
部、三菱商事、三井物産、伊藤忠商事、大倉商事、住友商事、

成蹊学園近況

昭和四十年六月一日
昭和四十二年三月末日

一、総 務 局

○運輸大臣よりの表彰(四十年六月一日・気象庁)

成蹊学園天文気象観測所長加藤藤吉先生は、多年気象観測に従事、気象知識の普及につとめ、気象業務に貢献した功績顕著と認められ、運輸大臣より表彰。

○成蹊波左間寮落成式(七月八日・千葉県館山市)

○永年勤続者表彰式(十月十六日)

大学政経学部教授 中村清一郎氏(三十年勤続)

中学・高校教諭 飛田 隆氏(三十年勤続)

中学・高校教諭 栗原 雄一氏(二十年勤続)

○理事会(十一月二十四日・三菱銀行本店)

評議員改選

(1)寄附行為第十五条第一項第一号により選出された者(学校職員)

金子武蔵・神田秀夫・久野陸夫・小島鉦作・国分勇雄・杉山
穰・関島久雄・祖父江寛・野村純三・飛田隆・土方敏夫・松
田道雄・村上莞爾・吉崎恵次

(2)同第三号により選出された者(功労者・学識経験者・父兄等)